



対人支援点描 (9)

「このごろの幼稚園の風景①」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

1. はじめに

2013 年に幼稚園の園長を引き受けてから 4 年が過ぎた。4 年といっても最初の 3 年間は、仕事の業務の中心が福祉事業所ということもあり、週 1～2 日程度の名ばかり責任者の状態であった。運駅会議を行い、日誌、出納管理といった業務が中心で直接保育にかかわる機会がなく過ぎた。しかし、昨年度より福祉事業所の業務をリストラして、ほぼ毎日浦河町からえりも町に車を走らせて顔を出すようになった。

幼稚園のことは、わかっていたようで、やはり毎日顔を出すようになると、個々の子どもたちとのかかわりの密度が変わってくる。それぞれの育ちの変化が見て取れる。いわゆる定型発達の子どもの集団を観ることから多くを教えられる。また、小さくても、そこは人であるので、一人ひとりの交流が楽しい。

あまり正常異常、健常障害といった言葉に振り回されたくない気持ちがあるが、これまで児童養護施設や障害福祉の現場、精神科医療に近いところでの活動が中心であっただけに、これまでとは違った風景が見えるようになってきた。

不定期であるが、そんな幼稚園の風景か

ら思索を深めたい。

2. 私の勤める幼稚園

私の勤める幼稚園は、光の園幼稚園という名前の幼稚園です。その始まりは、賀川豊彦(1880～1960)というキリスト教の伝道者で社会活動家であった人が、えりも町を回った際に、この地域の保育活動のためにお金を置いて行ったことに始まります。賀川豊彦が北海道の各地に同様に資金を付与し、そのことがきっかけとなり保育活動を始めた幼稚園が幾つかあったそうです。ですが、現在も残っているのは、私たちの幼稚園のみとなっています。そういうことでは、歴史ある幼稚園といえます。また、人口 5000 人ほどのえりも町という小さな町にある唯一の幼稚園です(*他に町立の保育所が 3 カ所ある)。幼稚園児の人数は、現在、25 名ほどです。例年は、各学年に 10 名ほどの子どもたちがいるのですが、今の年中さんたちが 4 人であったこともあり、この 1～2 年は 25 名前後の推移となっています。二人の幼稚園教諭とともに 2 クラスで保育活動を行っています。最盛期には、100 名近くの子どもの子どもたちが幼稚園に通っていたそうですが、北海道の中

での地方の現状と類が漏れず少子高齢化とともに、現在の状態になりました。

3. 全道一出生率が高いえりも町

光の園幼稚園のあるえりも町は、実は北海道で出生率が 1.90 と一番高い。幼稚園に登園してくる子どもたちの様子を見ると、実際にひとりっ子の子どもが少ない。

私が北海道に来て、日高地方の浦河に住み始めたときに感じたことは、女性の喫煙率が高い（実際に、女性の喫煙率は全国一だそうです）のと、若い夫婦が多いこと、元職場での話であるが離婚されている方が多い（実際に、全国で一番か二番目に離婚率が高いそうです。）という印象でした。

なぜ、このような話題を出すかということ、えりも町の出生率が高い理由の一つに若い夫婦が多いという点に関係しています。

えりも町は主に漁業と牧畜業が中心の町ですが、その中でも漁業（昆布漁が中心）で、昆布漁は家族総出でする仕事です。量のシーズンになると、祖父母、父母、幼稚園児くらいの子ども、親類まで一家総出で早朝から仕事をします。こうした若い人も働ける環境（地場産業）があり、子育てができる収入があり、子どもをみる祖父母の応援がある、というのが強みであるといえます。

けれども、昆布漁をしているということでは、北海道内のほかの地域でも同様な地域や町がたくさんあります。やはり、どこかえりも町ならではの背景があるように思います。

若い人が働ける仕事があるといっても、相対的には北海道内の都市部の人の収入と比べようがありません。日高地方は、全道内でも平均所得が低い地域です。ですか

ら、特別、えりも町が恵まれているということでもないわけです。

また、祖父母の子育ての応援が得られるという指摘も、どうも当てはまりません。というのは、えりも町には自衛隊の基地があり、そこで働いている隊員家族も、子どもの数に関しては同じような状況だからです。多くは核家族の転勤族です。こうなってくると、何が良い結果を生み出しているのだろうと考えさせられます。

また、えりも町が子育ての政策に力を入れているかということ、それほど特別なことをしていないように感じます（こういうことを書くと、役場の担当者から叱られてしまうかもしれない）。

そこで、まったくの私の印象論となりますが、えりも町には、どこか若くして家庭を持つのはいいもんだ、子どもは二人くらいは育てたい、という雰囲気があるように感じます。これはかなり主観的な物言いで、主観以外に根拠がないので私の感想ぐらいのものです。

けれども、お互いが見えるような小さな町で若い家族が頑張っている、子育てに仲睦まじく奮闘している様子がわかる。生活が大変でもやっていけるという雰囲気は大切な気がいたします。

これを別の表現でいえば、「つながり」や「見とおしを持つことができる」というようにいえるかもしれません。

特別に楽にならなくても、何とかなる、という全体の雰囲気は、ある種の安心感につながるものだと感じています。

4. でも課題が…

えりも町の出生率が高いのは、幸いに良いことであるのですが、課題を抱えています。

それは、若者の流出が避けられないという事です。

北海道の人口の三分の一強が札幌市に集中しています。今もその傾向は変わりません。大学が札幌に集中していることや、卒後の仕事の間があることなどが主たる理由です。しかし、もう少しマクロにみると、さらに札幌市から東京などに仕事を求め、人口が流出している現状があります。(最近、東京都近郊からふるさと納税批判が出始めています。理由は税収が低下しているためというのです。しかし、北海道の現状を思うと、都市部に一極集中していく社会構造自体がいびつで、地方の町を疲弊させていっています。えりも町では、ふるさと納税で教育や福祉に予算がさけるようになっていきます。ぜひ、えりも町に、地方の町村に、ふるさと納税をしてください。)

そのため、就労や進学する年齢になると地元から離れていきます。昔は、漁師の子どもは漁師になれば一生食べていけるといって、あえて進学や他の職業を進めることが少なかったそうです。しかし、今の子どもたちの親の世代時分には、都会の学校に進学する、一度外の仕事をしてから地元へ戻ってくるという経験者が増えているため、自分の子どもにはあえて地元にいることを求めなくなっています。

こうしたことから、ますます地元にいる若い世代が定着しなくなっています。Uターン組もいますが、やはり流出組の方が多い現状です。

それに、自衛隊に勤めているところの子どもは、転勤族ですから大人になってから戻ってくるということがほぼない現状です。

5. 幼稚園の子どもたち

幼稚園の子どもたちの姿を伝えたい気持ちもありましたが、今回は、子どもたちの生活の背景みたいなものの紹介となっていました。

けれども、子どもたちが親や環境の影響を背負って育っていることも事実です。子どもたちの普遍的で変わらない姿と、個別の姿を重なり合わせながら、続く幼稚園の風景を伝えていけたらよいと思います。